

藤原 柯芳（ふじわら・かほう）

1、プロフィール

秋田出身。新聞人として県俳壇に登場、古男会・善知鳥吟社・松涛会・十和田などの俳会に参加・協力した県俳壇の長老的存在。

<生没>

1875(明治8)年8月 日 ~ 1955(昭和30)年2月4日

<青森との関わり>

秋田出身。青森五連隊入隊後青森の新聞社に入り、俳人として青森市・県俳壇の指導者的存在であった。

2、作家解説

本名作治。明治8年8月、秋田県仙北郡長野村に生まれる。学制発布後も続いていた村の寺小屋に学ぶ。青森の歩兵第五連隊に入り、除隊後、「陸奥新報」の記者となる。同紙俳壇は曙吟社の田沢梧石と連携していた。彼は同吟社に属し、40年青森市俳人番付で西の張出大関であった。40年河東碧梧桐が来青し梅原薫子宅に泊った時、伊藤竹馬・津幡秋来らと歓迎句会を催した。その席で碧梧桐の「春待つや宿痾(あ)に堪へて憂ひごと」の半折揮毫が彼に与えられたが、以後諸俳人の手に渡り因縁話を生んだ。同年2月の碧梧桐歓迎県下俳句大会で作った「濡れ爪籠楯火に干して蕎麦湯かな」の句が碧梧桐の紀行文『三千里』の中にとられている。

明治末年、日露戦争前後の社会状況、俳人の移動により俳壇は低迷するが、それは中央の碧梧桐の新傾向運動による混迷の影響でもあった。この頃木村横斜・島川観水・古川天仙・薫子・竹馬らと結んだ古男会は、こうした情勢への対応であったといえる。

大正元年柯芳は青森実業新報社を作り昭和10年代にまで継続。大正10年淡谷しづくが起こした善知鳥吟社は大塚月洞・高松玉麗らを擁し地方の俳句会にも

呼び掛けた。季刊俳誌「善知鳥」の主選者は横斜・柯芳であった。同誌には俳即禪という彼独特の俳論が載った。昭和2年以後3年間、彼は横斜・野坂十二樓とともに松濤社の課題5句集の特別選者となった。10年、「青森日報」・ゆかり吟社の選評を手がける。また『県句集』（松濤社・昭和5年以後）には、多くの句を送った。同集28年版の略伝によると内藤鳴雪の千代田会同人、秋田の安藤和風に師事、昭和21年得度、現在遊行僧などとある。『横斜遺稿』の企画、編集の桂閑村への依頼などの他、俳壇の世話人的な役割を果たした。

30年2月4日死亡。同年3月10日十和田主催追悼句会が青森市東伝寺で行われ、同年の『県句集』には福士松濤が序文、高松玉麗があとがきで長老の業績をしのんだ。